

倉内 啓 | Hiroshi Kurauchi

デザイン工芸学科 染織造形

教授

- 1987 京都市立芸術大学大学院美術研究科修了
2005 第57回京展（京都市美術館）〔49回展 京都新聞社賞〕
第60回新匠工芸会展（京都市美術館、東京都美術館）〔第54, 67回展 富本賞, 59, 72回展 稲垣賞〕
テキスタイルの未来形2005（海岸通ギャラリーCASO：大阪）〔06, 07, 08, 09, 10, 11, 12年出品〕
2007 第16回染・清流展（染・清流館：京都）〔第9, 10, 11, 12, 14, 17, 18, 19, 20, 21回展〕
2011 現代の型染展「反復のリズム・集約の美」（染・清流館：京都）
広島市立大学・西京大学国際交流展（広島市立大学芸術資料館）
2012 歌舞伎と能を染める（染・清流館：京都）
2014 現代の造形 —Life & Art— 「版の力」展（東広島市立美術館）
染と書 —俳句からの創造—展（染・清流館：京都）
2015 工芸の数寄 和美茶美展（染・清流館：京都）
与謝野晶子のいろ —染と書—（高島屋美術画廊：大阪）
—俳句からの創造— 染と書 展（坂出市民美術館：香川）
きもの讃歌「与謝野晶子と百選会」（高島屋史料館：大阪）

現在 新匠工芸会会員、民族藝術会会員、日本テキスタイルカOUNシル会員
1994年4月着任

『泥ノ花』

この作品は2014年の「俳句からの創造—染と書—」と言う企画展に出品した
ものですが、染色作家が選んだ俳句を書家は文字で染色家は染作品で表現
し、並列させて展示するというユニークな展覧会でした。

私は、東日本の震災で被災された照井翠さんの『龍宮』と言う句集から、
“しら梅の 泥を破りて 咲きにけり” という句を選びました。

震災時の2011年には作品のテーマとしては、とうてい扱いきれなかった大き
なテーマだったのですが、震災からちょうど三年目にあたる2014年の3月に作
品を展示するという機会を得た事もあり、思い切つてとりあげました。

実は、いままでこの震災を正面から対峙する事に躊躇し、どちらかと言うと避
けて来ました。いい訳かも知れませんが、これまで見て来た数々のメディア映
像があまりにも痛ましく、現実的なものとしては、とうてい受け入れる事が
できなかつたからです。しかしながら、この句集に遭遇し確かなリアリティー
を突きつけられた気がしました。本当に哀しい現実が起こった事が、無知な
私の心の中にしっかりとした画像として結びつきました。

句集の作者、照井翠さんは私とほぼ同年の高校の教師で、釜石市で東日本大
震災に被災されました。生徒たちと高校の体育館での避難生活を余儀なくさ
れ、正気を保つべく俳句を作られたそうです。それは記録や表現ではなく回復
の営みだったのだと言われています。津波による無念の死を迎えざるを得な
かつた数多くの方々への鎮魂の思いを込めて、これらの句を編んだそうです。
そんな想いに少しでも寄り添い、この哀しき^{びんじつ}世界に何らかの意志を示す事が、
今を生かされている表現者としての責務だと強く思いました。

そして5年後、2016年4月の「熊本地震」。

私たちはどんな啓示を与えられているのでしょうか。

《泥ノ花》 2014
麻紙、墨、胡粉、銀箔 / 型染(糊防染技法)、摺箔
H2,040 × W1,240 × D100mm

